

月華に対する旅情の詠

平 館 英 子

一 はじめに

『萬葉集』卷第十五前半部を占める遣新羅使人等歌群の中に、筑前国志麻郡韓亭に船泊した時の作とされる六首の小歌群（以下、韓亭六首とする）が見える。天平八年（七三六）夏六月、悪化する新羅との関係を改善すべく新羅使が派遣された。阿倍朝臣繼麻呂（帰路病没）を大使とする一行は難波を出航、瀬戸内海を航行して、七月によく筑紫に到着する。筑紫館でのしばしの滞在の後、新羅に向けて出航するものの、玄界灘に漕ぎ出すことが出来ずに、福岡湾の出口付近の韓亭に足止めされた時の作とされる。秋から冬の玄界灘は波が荒く、航海上の難所として知られる。韓亭は糸島半島先端の漁港と推測され、福岡市西区宮浦に唐泊（港）の地名が残る。韓亭六首は、第一首に大使、第二首に大判官と作歌者の役職名が注記される。大判官は大使・副使に次ぐ役職で、壬生使主宇太麻呂が任じられている。遣新羅使人等歌群は「遣新羅使人等、悲別贈答、及海路慟情陳思、并当所誦之古歌」に始まるが、航行中の実録とされるのは「備後国水調郡長井浦船泊之夜作歌三首」（三六二～三六一四）からである。その第一首は大判官が詠む。ただし、

瀬戸内海航行中の作品には、他にこうした役職名の注記が無い。ところが、筑紫館に滞在中の作と推測される「七夕仰観天漢」、各陳所思作歌三首（三六五六～三六五八）の第一首は大使、「海辺望」月作歌九首（三六五九～三六六七）の第一首は大使の第二男の作歌とされる。さらに韓亭六首以後の「引津亭船泊之夜作歌七首」（三六七四～三六八〇）中の第一・二首は大判官、対馬の「竹敷船泊之時各陳心緒作歌十八首」（三七〇〇～三七一七）中の第一・七・九首は大使、第二・八首は副使、第三首は大判官、第四首は少判官の作歌とされる。筑紫を出立し、外洋への航海に臨む時期から大使或いは大判官といった役職の者達の牽引による作歌群が見えるのである。新羅に向けての緊張感の高まりと、遣新羅使人としての一体感の醸成が推測される。韓亭六首は、遣新羅使人等歌群を筑紫を中間地点として前半・後半と考えるならば、後半部での出発点に置かれた小歌群として位置づけられる。韓亭六首の構成と旅情の表現のあり方について考察したい。

二 大使の歌

到筑前国志麻郡之韓亭、船泊經三日。於時夜月光、

皎々流照。奄对^二此華^一。旅情悽噓。各陳^二心緒^一、聊以裁歌
六首

1 大君の遠の朝廷と思へれど日長くしあれば恋ひにけるかも

(卷十五・三六六八)

右の一首、大使

2 旅にあれど夜は火灯し居る我を闇にや妹が恋ひつつあるらむ

(卷十五・三六六九)

右の一首、大判官

3 韓亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし

(卷十五・三六七〇)

4 ぬばたまの夜渡る月にあらませば家なる妹に逢ひて来ましを

(卷十五・三六七二)

5 ひさかたの月は照りたり暇なく海人のいざりは灯し合へり見ゆ

(卷十五・三六七二)

6 風吹けば沖つ白波恐みと能許の泊まりにあまた夜を寝る

(卷十五・三六七三)

韓亭六首の題詞は、月光(此華は月華、すなわち月光の意)に對して旅情悽噓して詠んだ作とその主題を提示する。ただし、直接「月(月輪の意)」を詠むのは第四首と第五首のみである。先ず大使の作から検討する。

「遠の朝廷」は人麻呂が筑紫国に下った時の作の「大君の遠の朝廷とあり通ふ鳥門を見れば」(卷三・三〇四)、や家持作の「大君の遠の朝廷そ み雪降る 越と名に負へる」(卷十七・四〇一一)等のように大宰府や国府などの役所を指すことが多い。しかし、遣新羅使人等歌群中の雪連宅満への挽歌の「天皇の 遠の朝廷と 韓国

に 渡る我が背は」(卷十五・三六六八)や家持作の「大君の 遠の朝廷と 任きたまふ 官のまにま み雪降る 越に下り来」(卷十八・四一一三)等における「遠の朝廷」は役所として理解することは難しく、遠方に使用される官人の意と考えられる。第一首の意も後者で、遣新羅大使としての立場が先ず表明される。なお、第一首における公人という表明は、題詞に記す月光に對する旅情という主題との関連において、「月」との關係は考慮しておく必要があるらう。

鞞掛くる伴の緒広き大伴に国栄えむと月は照るらし

(卷七・二〇八六 詠月)

右は大伴の名のつく地に、国の弥栄の予祝を詠む。上二句は大伴を起こす序。大伴氏は天皇家の守護に当たたる家柄であり、「クニサカエムトは国栄ユベクといはむが如し」(万葉集新考)とされ、大伴の地に国が栄えると思わせるように月が照っているに違いないの意。「月」の照る様は国の栄えを象徴する景として把握されていることに注意したい。

大使による「大君の遠の朝廷」の表明は、国の栄えに関わる重責を担っていることへの自覚の吐露といえるが、「思へれど」の逆接はその自覚にも拘わらず「恋ひにけるかも」の詠嘆を導いている。「恋ふ」対象は詠まれないが、公に對する逆接が導くのは私であり、続く歌々が家妻を詠む点に従えば、家妻と把握してよいのであろう。「恋ひにけるかも」の理由は「日長くしあれば」という日数の経過である。「日長し」は、「恋しくは日長きものを」(卷十・二〇一七七)と見え、一年という具体的日数を把握させるが、当該の遣新羅使人等にとつては、六月出発七月到着の一ヶ月ほどであった。しかし、彼等にとつて秋という季節は任務を終えて帰京するはずの季

節であったことは、「秋さらば相見むものを」(巻十五・三五八二)、「秋風の吹かむその月逢はむもの故」(巻十五・三五八六)と遣新羅使
人等歌群の冒頭部分に詠まれ、秋の帰京の予想が表明されていた。
大使にとつて、それは重責から開放されるはずの時期でもあった。

結句「恋ひにけるかも」の「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形、
「かも」は係助詞「か」と終助詞「も」が一語として詠嘆をあらわ
す用法である。「ける」は助動詞「けり」の連体形でその用法は「過
去の事実から継続して存在した事実、または現在の事実を、その存
在や意義や理由などが、今においてはつきり認識されるにいたった
という形で述べるのに用いる」(時代別国語大辞典 上代編)と説
明される。「にけるかも」に接続する動詞はさまざまだが、「恋ふ」
への接続は、集中では当該歌のみである。

東人の荷前の箱の荷の緒にも妹は心に乗りけるかも

(巻一・一〇〇)

み立たしの島の荒磯を今見れば生ひざりし草生ひにけるかも

(巻二・一八一)

一〇〇番歌は久米禪師が石川の郎女に憐をした時の作で、妹が自分
の心に、荷前(諸国から献られる貢ぎ物の初穂)を緒で馬にくくる
ように、どかっと載ってしまっているの意で、そのことへの気づき
が詠嘆されている。一八一番歌は日並皇子薨去後の舍人等の慟傷歌
群中の一首。皇子の宮(鳥庄)の庭園内の池の石組みの所に草が生
えている、それを「今」という時間に見るといふ設定は、皇子の薨
去によって日々宮が荒廃をしていたことをはっきりと認識させてい
る。その認識への深い感慨の表明である。大使の作も、遣新羅大使
としての重責を思い統けていたにも拘わらず、日数の経過の中で気

付かない間に、日々家妻への思慕が募っていたことを、ここにはっ
きりと認識したことへの詠嘆である。その心情には大使としての責
任と私人としての感慨が共にあることを詠む。役目は役目として、
人としての普遍的な感情の表明と言える。

三 前半三首の構成

第二首は、大使の心情の表明を受けた大判官の作。故郷の妹への
思慕をそれぞれの生活の対比の中に表現する。旅にある「我」が、
夜に明るい灯火の下にあるのに対して、故郷の妹は闇の中で「我」
を恋しているであろうと推測するのである。当時の燃料事情につい
て「灯油の貴重であった時代に、一般下級官吏の私宅で、夜どおし
火をともしているわけではない」(萬葉集全註釈)とする日常が先
ず推測される。

灯火のかけにかがよふうつせみの妹が咲まひし面影に見ゆ

(巻十一・二六四二)

灯火の下にある妹の姿が強く印象に残るのは、灯火の油が貴重で
あり、灯火の使用が日常ではなかったことを窺わせる。一方で、「海
人の灯火」(巻七・一一九四、巻十一・二七四四、巻十五・三六三三)の
ように、業務用の灯火は必要に応じて使用されていた模様である。
すでに、石炭や石油の存在が「又越国献_三燃土与_三燃水」(天智紀
七年七月)と記録に残るが、一般に使われた様子は無い。

冬十二月晦、於_三味経宮_三請_三二千二百余僧尼_三、使_レ読_二一切经_一。
是夕、燃_二二千七百余灯_一朝庭内_一、使_レ読_二安宅_一・土側等_一经_一。

(孝徳紀白雉二年)

灯火の燃料が貴重な中で、盛大な灯火の記録は朝廷の権威の誇示に

繋がるものでもある。遣新羅使一行には十分な灯火用の燃料が支給されていたのであろう。

旅という非日常にありつつ、官吏として明々と灯火の中に居る。その明るさは「(ほととぎすを) 灯火を月夜になそへその影も見む」(巻十八・四〇五四)と月夜に匹敵するともされる。「月」が詠まれる第四首に「夜渡る月」、第五首に「月は照りたり」とある時間の経過を把握しうる表現を踏まえると、大判官の作歌時、「月」は出ていなかった可能性が高い。闇夜の妻を思うのは、「我」が闇夜の灯火の明るさの中に居る故であろう。「我」の居る空間の「明」と妻の居る空間の「暗」、「我」の居る旅という非日常と妻の居る家という日常。本来、辛苦と安堵として捉えられるはずの対比の関係が逆に捉えられている。ただし、「我」にとって、灯火の明るさの下にあっても本質的には旅にある不安に変わり無く、ここに旅と家にあるそれぞれの辛さが際立たせられる。

注意されるのは、「闇にや妹が云々」と、妹の生活が具体的に想起されている点である。旅情の表現として、望郷の思いの中に妹を思う「我」の情はもちろん、「我」を思う妹の情も数多く詠まれるが、「妹の生活」までを思いやる作は見出しにくい。遣新羅使人等歌群においても同様である。

我妹子し我を偲ふらし草枕旅の丸寝に下紐解けぬ

(巻十二・三一四五)

家人は帰りはや来と伊波比島齋ひ待つらむ旅行く我を

(巻十五・三六三六)

夕されば秋風寒し我妹子が解き洗ひ衣行きてはや着む

(巻十五・三六六六)

「我を偲ふらし」といった妹の心情表現の他に、妹が「我」のために「齋ひ待つらむ」、「解き洗ひ衣」を用意してくれているであろうといった妹の行為への関心が見られるが、妹自体の生活への関心は詠まれない。「我を恋ふ妹」として捉えられているとしても、闇の中に居る妹の想像は新鮮な発想と言い得よう。

第三首の能許は福岡市西区能古島をさす。博多湾のほぼ中央にあり、韓亭からは東南方向に向き合う距離は六キロ余。第六首に「能許の泊まり」ともあり、その二帯を曖昧に捉えていたと推測される。「能許の浦波立たぬ日はあれども」は、波の立つ日があることを前提として自然の緩急を把握している。「家に恋ひぬ日はなし」は「家」と詠まれるが、「に恋ふ」とある場合の対象はすべて人とされる。⁽⁵⁾「浦波立たぬ日はあれども」の逆接が導く家妻に対する思慕を「恋ひぬ日はなし」と恒常的に継続している心情として言い切っている。変化する自然と変化しない心情との対比でもある。家妻への思慕に対する確信は、第一首における「恋ひにけるかも」の認識と呼応する。

前半三首において、第一首が大使自らの心情の表裏を吐露しているのに対して、第二首は灯火を点す「我」の身の周り(旅の生活)から、妹の身の周り(家の生活)を想起する。そして第三首では、「我」の外界にある眼前の景が妹への思慕を導いている。すなわち、三首に視点の移動を見ると、第一首は自己の内面、第二首は自己のおかれた状況、そして第三首は外界の景へという遠心的な展開をなす構成として理解される。しかも三首いずれも逆接の接続助詞を伴うことで、第一首では自己の心情の表裏を対比させ、第二首では自己のおかれた状況を妹のそれと対比させ、さらに第三首では自然の

摂理と自己の心情とを対比させている。三首の逆接の接続は本来あるべき公的立場と抑えきれない私的な思慕、旅の明と家の暗(闇)という不安と安心の逆転、そして自然の摂理を越えるかのような妻への思慕という把握をも有して、膨らみのある表現による展開となっている。当該の小歌群の主題が月光に対する旅情であることは冒頭で触れた。しかし、前半三首には「月」が詠まれない。詠まれているのは第一首の心情への気づきから第二首の身の回りへの観察を経て、第三首の外界の景の把握へとという視点の展開である。視点が外界の景に移動した第三首に続く第四首にはその外界の景における「夜渡る月」、すなわち移動する「月」が詠まれている。三首の遠心的構成は、第四首の「夜渡る月」へと展開する。ここに前半三首は「月の出」を待っている状況であることが理解される。

四 「月」を詠む

第四首は黒に關する語を導く枕詞「ぬばたまの」を冠することに よって、前半三首の夜の闇を継承し、その空間を移動する「月」の景が観察される。「夜渡る月」の動きを契機として、韓亭に停留したまま動けない「我」自体と妹の許への往還を望む「我」の心情とが対比をなす。「月にあらませば」の反実仮想による願望は妹の許への往と、還とを意図しており、第一首における「大君の遠の朝廷」としての意識を確認させる。

遣新羅使人等歌群で「月」を詠むのは、韓亭六首の他に次の通りである。筑紫における「海辺望」月作歌九首(卷十五・三六五九〜三六六七)は題詞に「望」月」と見えるが「月」を詠む歌は含まないため、今回の検討からは外している。

A 從長門浦^一 舶出之夜仰^二 觀月光^三 一作歌三首

月誦の光を清み夕なぎに水手の声呼び浦回漕ぐかも

(卷十五・三六二二)

山のはに月傾けばいざりする海人の灯火沖になづさふ

(卷十五・三六二二)

我のみや夜舟は漕ぐと思へば沖辺の方に梶の音すなり

(卷十五・三六二四)

B

到^一対馬島淺茅浦^二 舶泊之時不^レ得^三順風^四 経停五箇日於^レ是
瞻^二望物華^一 各陳^二働心^一 作歌三首

百舟の泊つる対馬の浅茅山しぐれの雨にもみたひにけり

(卷十五・三六九七)

天ぞかる鄙にも月は照れれども妹を遠くは別れ来にける

(卷十五・三六九八)

秋されば置く露霜にあへずして都の山は色付きぬらむ

(卷十五・三六九九)

Aは、月光の下の長門の浦の景の描写。「月誦」は「月」の意。三首は月光の下で入江を漕ぐ水手の声の賑わい(三六三二)から、「月」が山際に沈み、月光が消える中で沖の漁のかがり火に視点を移し(三六三三)、自分の乗る船と沖を漕ぐ船の梶の音のみが響く闇の世界(三六二四)を詠む。そこに旅情の直接的な表現は無いが、「月」が移ろう景に旅情は感得されよう。Bは対馬で秋の盛りの景に遭遇し(三六九七)、「月」の照る景を介して妹との距離を把握し(三六九八)、都の山が紅葉した確かな景を想起する(三六九九)。Aは「月」の移動を、Bは月光に妹の遠さを把握する。ここで「月」の表現の方法を検討しておきたい。

集中に景としての「月（月輪の意。以下同）」を詠む歌は多い。⁽⁷⁾
その最も早い例は次の歌であらう。

熟田津に舟乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

（巻一・八）

斉明天皇七年（六六二）、百濟救援のための船団が、熟田津の港を出立するときの額田王の歌で、「月」が出、潮が満ちるのを待つて出航を宣言した作とされる。力強い宣言には、「月」が高く上がり、豊かな海面を明るく照らしている状況がふさわしい。そこには「月」が高く遠く上がった空間の広がり、皎皎と照らす月光の美しい景、そして待つ対象であった「月」の動きといった、「月」に関連する要素が把握される。左注が引く『類聚歌林』に記すような舒明天皇との思い出に対する斉明天皇の歌詠であったとすれば、「月」に対して想起されるのは、月光の靈妙な景だけでなく、それを待つ心情に加味される相聞的な情調であらう。

「月」を詠む歌の中では、「月」の移動を示す「夜渡る月」を詠む作品が目につく。

あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも

（巻二・一六九）

人麻呂作の日並皇子尊殯宮之時挽歌の反歌第二首。皇子の薨去は「月」が移動し、隠れることに託されている。「月」の移動や隠れることには時間の経過が把握される（巻二・一三五、巻二・二〇七など）が、類似の表現として「月傾きぬ」（巻一・四五）も挙げられよう。もちろん、こうした表現は死別による別離の場面に限るわけではない。「月傾きぬ」（巻十・二二九八）は相聞歌に詠まれてもいる。

児らが家道やや問遠きをぬばたまの夜渡る月に競ひあへむかも

（巻三・三〇二）
万代に照るべき月も雲隠り苦しきものぞ逢はむと思へど

（巻十・二〇二五）

三〇二番歌は阿倍広庭の作。妻の家への道のりを「月」と競う発想には「月」の移動の速さが把握される。一方、「月」が隠れることを惜しむ背景に、「月」の永遠性が把握される（二〇二五）ことは、照る「月」が国の弥栄の予祝となり得ていたことに関説しよう。ただし、一首のまとまりとして把握されるのは、いずれも相聞的情調である。

もししきの大宮人の罷り出て遊ぶ今夜の月のさやけさ

（巻七・一〇七六）

「詠月」中の一首。集中の「月」の表現で、「月」の景そのものの賞美を主眼とする例は、多くは無い。「月」の賞美はむしろ「妹」の賞美へと展開する。

朝日影にほへる山に照る月の飽かざる君を山越しに置きて

（巻四・四九五）

「月」と女性美との関係は、「望月の 足れる面わに」（巻九・一八〇七）の満ち足りた美しさを初め、「月」の見飽きることの無い美を妹への名残惜しさに重ねている。

我が背子と二人し居らば山高み里には月は照らずともよし

（巻六・一〇三九）

春日山おして照らせるこの月は妹が庭にもさやけかりけり

（巻七・一〇七四）

月見れば国は同じそ山隔りうつくし妹は隔りたるかも

（巻十一・二四二〇）

二人が共に居るときは「月」は不要であるらしい（一〇三九）。天空高くある「月」は遠く隔立っている二人を等しく照らし（一〇七四）、二人は同じ「月」を隔たったままに共有する（二四二〇）。「月」の表現は、熟田津の歌に見られた要素を展開させて、多様な表現を獲得しており、そこに相関的情調の展開も見得る。ただし、「月にあらませば」といった「月」となって往還することを願う表現は見当たらず、独自の発想と考えられる。

五 月は照りたり

第五首は「ひさかたの月は照りたり」と枕詞を冠して、二句切れの形で、先ず提示される。「ひさかたの」は天・雨・月など天及び天上のものにかかる枕詞である。二句切れの構造は、「月」の輝きが天空に広がっていることを感得させる。「たり」は「テリアリの縮約形と考えられ、そこに含まれるアリの要素よりして、動作・作用とも、状態化された意味において表すことが多い」（時代別国語大辞典 上代編）とされる。「月が照っていること」がそこに一つの状態として捉えられていることを考えさせる。「月」が皎皎と照る空間は、下の句が表現する「海人のいざり」の空間をも覆うものであらう。

集中、「たり」によって、二句切れとなる構造を有するのは次の三首である。

我はもや安見児得たり皆人の得かてにすといふ安見児得たり

（巻二・九五）

大和道は雲隠りたり然れども我が振る袖をなめしと思ふな

（巻六・九六六）

現には言も絶えたり夢にだに継ぎて見えこそ直に逢ふまでに

（巻十二・二九五九）

内大臣藤原朝臣（鎌足）による九五番歌は二句と五句が繰り返され、歌謡的手法が残る。上二句では采女安見児を得たことが宣言され、その状態への満足が「皆人の得かてにすといふ」にあることが説明される。次は同伴旅人が大宰府から上京する折りの作。旅人が大和へと別れてゆく道は遠く雲に隠れて見えないとされる。下三句はこの見えない状態に対する詠嘆が、「しかれども」という逆接によって、見えなくとも別離の袖を振らずにはいられない心情として説明される。二九五九番歌は正述心緒である。便りも途絶えている現実を提示し、その状態を受容しながら、せめての夢見を願っている。

第五首の「ひさかたの月は照りたり」の二句切れは、第四首の「夜渡る月の景」を受け、今、天空に「月」が照ってある状態を提示する。「海人のいざり」は「灯し」とある点からは「いざりびの略」（万葉集総釈）。その有り様を『萬葉集古義』は「月、光の清きがうへに、彼方にも此方にも、隙無く、海人の海火を燭し合、せて、いよ／＼海面の明かに見やらる、となるべし」と詳しく説明する。天空に「月」が照っている状態の提示は、天空への視線を海面に移す時、海面も又「月」に照らされて、それによって漁り火が照らし合っているように見えることを意味しよう。『万葉集評釈』が「秋の月が明るく照してゐる海上に、夜釣をする海人船の漁火が点々と赤く散らばってゐる光景に感を起こした」とするのは、「ひさかたの月は照りたり」と二句切れで提示されたことの結果としての説明である。二句切れで提示された空間こそが主眼と考えられる。

「月」に照らされた眼前の景は、月光が照らす天空にはただ一個

の「月」が存在するのに対し、海面には複数のいざり火が動く。闇を背景に、上方に一個の大きな光、下方に複数の小さな光の対比。見事な景である。そこには暇無く働く人々の日常の継続が把握されてもいる。「月」に対する旅情はその景に対して、旅という非日常に留まり続けなければならない「我」の感慨でもあろう。そして、海人達が漁を行える穏やかな波の状況の認識は出航の可能性を示唆するものでもあろう。旅先の「月」の景への感慨は、停留を余儀なくされた韓亭から、出航の可能性へと視線を転じてゆく。

第六首は、第五首までの「月」の景から、新羅への出航へと意識を転換した作と捉えられる。「沖つ白浪恐みと」に玄界灘の荒波に遮られたことに対して、自然への畏怖によって停留を余儀なくされた現状が把握される。題詞によれば停留期間は三日に過ぎないが、筑紫までの予定の大幅な遅れはその日数を何倍にも感じさせたとしても無理はない。

第四首から第六首は「月」の動きに視点を当てて、眼前の景を描写している。前半の三首が「月」を詠まずに逆接の接続助詞によって家妻への思慕の情を展開しているのに対して、後半の三首は「月」の景に視点を当てて、外界の自然と人事との対比を、都の妹から眼前のいざり火の景へ、そして韓亭で停留を余儀なくされた遣新羅使人等の一行が、いよいよ新羅へと出航する、その現在へと戻っているのである。ここには「月」を詠む展開に家妻思慕の情調の表現から彼らの現実へとという展開を見ることが可能である。

六 おわりに

韓亭六首は、前半三首は闇夜、後半三首は月夜という構成をなす。

前半三首は闇の中に灯火を点しながら月の出を待つ状況の下、「大君の遠の朝廷」から歌い起こして、心情の表裏を吐露する大使の歌に始まり、灯火のある環境から、韓亭の外界の景へと遠心的に視点を移し、後半三首はその外界の景に「月」が「夜渡る」と天空へと移動し、天空から海面へと照る美しさを捉えて、海の高波を恐れて停留した現実へと回帰する。その表現には「月」であれば「妹」の下に往還するといった「月」に関しての独自の表現も見られる。前半三首が逆接の接続助詞を用いて公務と私情、旅の明と家の闇、自然の変化と思慕の恒常といった対比を表現するのに対して、後半三首は、「月」となつての往還の願望を誘う外界の「月」の動き、天空に照る「月」の提示と「月」の照らす海面の様子、そして海への畏怖と停留の現実といった組み合わせによって、外界の事象に関係させて、妹への慕情から外部の日常へそして遣新羅使人としての現実へと展開させている。以上、遣新羅使人等が新羅に向けて外洋へと漕ぎ出す折の旅情を「月」に託して緊密に構成した小歌群と考えられる。

なお、この構成に対して、題詞は地名・旅程・歌の場の景そして情感の説明を詳しく記している。用いられている此華（月華・華月）や皎皎の語句は「名月何皎皎 照我羅床幃 憂愁不能寐 攬衣起徘徊」（古詩十九首 五言 十九）文選二十九卷、「名月照高楼 流光正徘徊 上有愁思婦 悲歎有余哀」（曹植「七哀詩」文選二十三卷）「兔影生雲夜 娥形出漢時 欲伝千里意 不照十年悲」（皇太子檢文「雜題二十一首 其四 華月」玉台新詠 卷十）のように中国詩に多く見られる語句で、月華の下での思慕の情を詠じている。題詞には韓亭六首の構成に思慕の情を反映させようとい

う意図を窺わせる。

- 注(1) 遺新羅使人等歌群中の作品が実録であるか否かについては、伊藤博「萬葉の歌物語」『萬葉集の構造と成立』下(塙書房 昭和四九年 初出 昭和四三年九月)・同「一つの読み」『萬葉集の歌群と配列』下(塙書房 平成四年 初出昭和五七年十一月)・同「遺新羅使人歌群の原核」『萬葉集の歌群と配列』(下 塙書房 平成四年 初出昭和五九年十一月)及び吉井巖「遺新羅使人歌群」『土橋寛先生古稀記念日本古代論集』(笠間書院 昭和五五年)・同『萬葉集全注 卷第十五』(有斐閣 昭和六十六年)に詳細な検討がある。
- (2) 遺新羅使人等歌群には公的任務に触れる作は殆どないが、一行の心情の根底には公的任務への強い思いがあったはずである。拙著「属物発思歌―遺新羅使人等歌群中の位置」『萬葉悲別歌の意匠』(塙書房 平成二十七年 初出平成一八年六月) 参照。
- (3) 『芸文類聚』には「礼斗威儀曰、政太平則月円而多輝。政升平則月清而明」(天部上・月)が見える。
- (4) 当時の燃料事情については、宮本馨太郎『灯火―その種類と変遷』(朝文社 平成六年 初出昭和三九年) 参照。
- (5) 伊藤博「恋ふ」の世界」『萬葉集の表現と方法』下 塙書房 昭和五一年 初出昭和三四年七月)。
- (6) 「海辺望」月作歌九首」について月は出ていなかったとする説(伊藤博「海辺にして月を望む歌九首」『萬葉集の歌群と配列』下(塙書房 平成四年 初出昭和六三年二月)、川端善明「海辺の感情」『伊藤博博士古稀記念論文集 萬葉学藻』塙書房 平成八年)に対して、九首中の旋頭歌に「天の原振り放ければ夜そふけにける」(巻十五・三六六二)とある点に注目して、「夜が更けた」という判断には「月をみた」可能性を示唆する論がある(森本直子「万葉集卷十五の「海辺望月作歌九首」

『上代文学』第八五号 平成二二年一月)。

- (7) 小野寛「万葉の月」『天象の万葉集』高岡市万葉歴史館論集3(笠間書院 平成二二年)、神野富一「月夜」考」(『上代文学』第八三号 平成一一・一一) 参照。
- (8) 「玉台新詠」卷一には「雑詩九首 其九」とある。
- (9) 「玉台新詠」卷二には曹植「雑詩五首 其一 名月照」高樓」とある。